

九州支部

入来敦久, 江川勝士, 福永秀智

瀬ノ口頼久, 乗松克政

過去9年間に本院で切除した原発性肺癌は127例(切除率42.8%)。性比は男85:女42, 年齢は39才~79才で約半数が60才台。組織型は扁平上皮癌43例, 腺癌64例, 大細胞癌18例, その他2例。予後は最長生存は7年2月で, 5年率は28%であった。

6. 高令者肺癌の肺切除例について

国立病院九州がんセンター呼吸器部 一瀬幸人

八板英道, 原田泰子, 田中康一

安元公正, 広田暢雄, 大田満夫

70才以上の高令者肺癌切除例

43例につき, 若年者群等との比較検討を行った結果, 術前閉塞性換気障害及び術後心電図異常を呈す例が多くあるも, 術後生存率は若年者群と比し劣る事なく, 肺機能不良例においてもlimited-operationなど, 積極的に対処すべきと思われた。

7. 肺癌の放射線治療成績の検討

久留米大学放射線科

袋野和義, 安田幸彦, 中下真二

工藤敦嘉, 赤川晴美, 浜田正之

小金丸道彦, 大竹 久

昭和47年より53年までの肺癌患者(組織型判明, 4000rad以上照射)は100例であった。このうち, 不均等分割照射を16例行っており, 従来の均等分割照射と対比しつつ治療成績を検討した。均等群の1年粗生存率は23.8%, 2年8.0%, 不均等群は1年56.3%, 2年20.0%であった。

8. 肺癌放射線治療におけるBA1併用に関する検討

鹿児島大学放射線科

園田俊秀, 小林尚志, 小山隆夫

伊東隆碩, 田之畑修朔

赤崎郁郎, 篠原慎治

BA1併用の有用性に関して原発性肺癌放射線治療例100例(昭和47年12月~54年3月)について, BAI併用群62例と非併用群38例の治療成績の対比検討を行ない, 併用群では良好な治療成績が得られたことを報告し, BAI併用による照射線量のreductionの可能性を言及した。

9. 原発性肺癌に対する放射線療法とFT207坐薬の併用療法について

長崎大学第二内科 今村由紀夫

神田哲郎, 植田保子

籠手田恒敏, 奥野一裕

泉川欣一, 広田正毅, 原 耕平

佐世保市立総合病院

松本武典, 堤 恒雄, 石崎 驍

長崎市民病院

池辺 璋, 中野正心

肺癌の放射線療法に際して, FT207坐薬の併用療法を試み, 放射線単独療法と比較し, 併用療法がやや優れた成績であった。

10. Adriamycinによる癌性胸膜炎の治療(ADM)

長崎大学第二内科

植田保子, 今村由紀夫

神田哲郎, 籠手田恒敏

広田正毅, 原 耕平

長崎市立市民病院

池辺 璋, 中野正心

市立長崎成人病センター

奥野一裕

佐世保市立総合病院

堤 恒雄, 松本武典, 石崎 驍

42例の癌性胸膜炎(肺癌)をTube thoracostomy+ADM注入にて治療し, 84.2%に有効だった。

11. 切除不能肺癌で化学療法により完全緩解したと思われ2症例の検討

国立療養所大牟田病院

林 俊治, 光武良幸, 永田 潔

半井一郎, 篠田 厚

我々は切除不能肺癌の化学療法でピシバニール併用することで, 骨髄機能抑制を軽減させエスキノン10mg大量投与を行い計測可能例で50%の有効率を得ています。今回はエチレンイミノキ系のアルキル化剤であるエスキノン10mgとピシバニール併用よりさらに骨髄抑制を軽減させ, かつ長期間化学療法を行う目的でピリミジン拮抗体の代謝拮抗剤であるキロサイドを加えて切除不能肺癌の化学療法を行い完全緩解に近い2症例を得たので, 検討を加え報告した。

12. 術前CEA高値を示した肺癌症例の術後経過とCEA値の変動

産業医科大学第二外科

村上 勝, 永田真人, 川原英之

石倉義弥, 吉松 博

肺癌では術前CEA値陽性は60%に及び, 腺癌に陽性率が高く病期の進行と共に陽性率は高かった。術前CEA10ng/ml以上を示し切除し得た2例の腺癌症例の術前後のCEA値の変動を示し, 癌再発のモニターとしてのCEA値測定限界について言及した。

13. 肺癌患者に於けるCEA測定の臨床的検討

宮崎医科大学第二外科

和気典雄, 吉岡 誠, 米沢 勤

松崎泰憲, 崎浜正人, 田代 光

吾妻康次, 浜砂重仁, 前田隆美

迫田耕一郎, 鬼塚敏男

松本和久, 柴田紘一郎

古賀保範, 富田正雄

開院以来, 教室で経験した原発性肺癌患者52例中, CEAを測定しえた23例について, その臨床的意義を検討した。2例の興味ある経過を示した症例を供覧し, 臨床上CEA測定の意義を提示した。